

三河アララギ

平成二十八年

十一月号

第六十三卷 第十一号



ニューヨーク日記(121) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Gallagher's Steakhouse

Blue Shoe Diaries



昔からあるニューヨークのステーキハウスのGallagher's、去年ぐらいにレノベーションをしたのは聞いていたけど食べに行く機会もないまま忘れてた。それに数年前ここで食べた時は別に印象に残らない感じの食事だったし。来る予定もなかったけど丁度ShoeLadyがマルティニーが飲みたくなくて入ったらなんかいい感じだから食べに来ない? っと。バーも男らしくカッコよくなってそこでサーロインステーキを分けて食べたら美味よく来るように成りそう!

Hadn't been at Gallagher's since the renovation and it was such a nice surprise! The place is looking great, the staff is awesome, and the food is spot on! This is their sirloin steak cooked to a perfect medium rare. Loved it!! I think they are now added to our usual rotation of restaurants in the neighborhood! yay!

目次

第六十三卷第十一号(通卷七五五号)

表紙・モレノ氷河	今泉 由利 (1)	水野 絹子 (26)	
ニューヨーク日記 [12]	Blue Shoe (2)	牧原 規恵 (26)	
黄素馨の門	御津 磯夫 (4)	稲吉 友江 (26)	
歌集「はゝきくさ」III	大須賀寿恵 (5)	鈴木美耶子 (26)	
歌集「草々」	今泉 米子 (6)	吉見 幸子 (26)	
歌集「はゝきくさ」I	河原 静誠 (7)	牧原 正枝 (27)	
寝待月	岡本八千代 (8)	石田 文子 (27)	
四次元	今泉 由利 (9)	森 厚子 (27)	
孫と子と	弓谷 久子 (10)	山崎 俊子 (27)	
棕の実	内藤 志げ (11)	三田美奈子 (27)	
帰省雑詠	林 伊佐子 (12)	現代学生百人一首	東洋大学
鉢巻	安藤 和代 (13)	岩崎有利沙 (28)	
隠れ蓑	伊藤 忠男 (14)	本幡 直子 (28)	
曼珠沙華	阿部 淑子 (15)	間仁田珠里 (28)	
仙人掌花	鈴木 孝雄 (16)	高石 幹太 (28)	
敬老	清澤 範子 (17)	倉林 祥子 (29)	
音羽川	白井 信昭 (18)	市倉 望 (29)	
夕顔	森岡 陽子 (19)	瀧口 結 (29)	
姫塚	杉浦恵美子 (20)	湯浅 美魅 (29)	
絵ハガキ	山口千恵子 (21)	米田 文彦 (30)	
三輪山 (I)	夏目 勝弘 (22)	柳田 皓一 (30)	
亀戸大根	鮫島 満 (23)	山元 正規 (30)	
歌集「夢のつづき」	水上 信子 (24)	山迫 京子 (31)	
私の一首	森岡 陽子 (25)	森岡 陽子 (31)	
『こよせ』		田中 清秀 (31)	
『こよせ』			
『俳句』			
		かさね吟行会	
		『酔いの徒然』(55)	
		本からのあれこれ(12)	
		ある自然科学者の手記(54)	
		絹の話(72)	
		短歌に詠まれた茂吉 六十二回	
		楽しい時間(48)	
		漢詩研修	
		『歴代天皇御製歌』(六十九)	
		童謡『落葉のワルツ』	貫名海屋資料館(52)
		三輪山 (I)	高橋 育郎(53)
		「氷魚」のことから(190)	夏目 勝弘(54)
		ことのはスケッチ(45)	岡本八千代(55)
		編集室だより(二〇一六年九月)	今泉 由利(56)
		野菜の花(5)	三河アララギ(58)
		お知らせ・「三河アララギ」について(60)	鈴木 孝雄(59)
			今泉 由利(32)
			松本 周二(32)
			植村 公女(32)
			夏目 漱石(33)
			田中 清秀(34)
			丸山酔宵子(36)
			米田 文彦(38)
			大橋 望彦(40)
			今泉 雅勝(42)
			鮫島 満(44)
			山本紀久雄(46)
			平井 茂行(48)

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

古よりつづける蟻のひとりかと信なきに楽し那智の時雨に

瀧白き山は原始の厚きいろ時雨ごもりに黄葉交へず

那智黒をうる店先のみせばやにくるしき雨のふりそそぐなり

ふりしきる時雨にぬれておちたぎつ瀧の補陀落つひにやさしき

中黒に染めたる竹の杖かりてのぼるや雨にたぎつ補陀落

ふだらくの瀧も時雨にこもりつつ買ひたる下駄に杖をつく妻

瀧の水絶えぬしぶきに恋ひ来りただ足もとの青き玉苔

杉くらき雫おとしてゆく秋の雨のさむさも瀧のひびきも

段坂のくだりも雨にあやふくて瀧いくたびも見てたちどまる

指にさげし那智の社のなまき榎の苗わが百年ののちこえて見よ

歌集「はゝきくさ」Ⅲ

大須賀寿恵

カルキ臭ふ茶を一息に飲みほしてまた書きはじむ「受精卵」のこと

十日の月の下びに蜜柑採りてをり二声高く五位鷺渡る

あつき雲の切れ間に一つ光る星五位鷺南に渡りゆきたり

頼れるはおのれひとりと言ひ切りし君の電話はをとつひの昼

薬師寺に登る石段なかばにて足硬はばりて坐りてしまひぬ

杉の葉の散り敷く屋根をはるかに見て東照宮に詣でず降りむ

誰が置きてゆきしか杉の自然木杖に拾ひて降らむとする

屋敷畑鋤きあるらしき鋤の音星の一つが光り初むる時刻

浮き漂ふ芥の間をメダカが泳ぐ明日の元旦雨来るらしき

霜おきて青葉保てるブロッコリーわが足癒えむ今年の春は

歌集 「草々」

今泉米子

隅棚すみだなに幾いくはたとせ二十年を過ぎつらむ白磁の香爐を清めむとする

昨夜の雨の雫凍りてかがやけり庭の本草も枯芝も土も

最上川の水をせばめて雪つもる広き河原を描きてよこしぬ

軒のきの上の枝よりほころぶ紅梅を年々言ひてこの年もまた

雨雲のおりゐしづみて新宿のあたりと指ししビルもかくりぬ

外泊を夫ゆるされしこの三朝こゑととのひてうぐひすのなく

黄素馨の青葉繁りて塞ぐ門命生きたる夫と帰りぬ

三河味噌買ひ来て恒のひそかなる暮しはじめむ家に帰りぬ

命生く夫と来りて防潮堤の高きところに腰かけてゐつ

さらばひて二人老ゆれば仙翁の咲くもひそけし鮭色の花

歌集「はゞきくわ」I

河原静誠

吾が疲れおもひたまひて下されし事務机の上のノボタン一輪
刈萱にりんどう一輪摘みそへて仏にささぐと家路をいそぐ
球数珠の葉づれ聞ゆる丸窓に破戒の尼のわが対ひ居り
立ちさわぐ心おさへて峯山の巖に去年は月を仰ぎし
合掌の姿ぞ和合と説きつつも今日の勤めに心乱るる
野菊の花供へつつ思ふ奥伝をたまはりし日の過去の茶会を
梢高く木守の柿の熟れたるに群雀あてさわぐ雨の日
かへりゆく園児見送る夕風に大漁をしらす部落放送
御仏は独生独死とのたまふを口に誦しつつ吾が父母を恋ふ
木枯の吹きこす水漬田の道寒く猫待つ家にわが帰り行く

寢待月

蒲郡 岡本八千代

書き上げし「氷魚」の原稿百九十回ポストに入れしは寢待の月夜

陰暦の今宵の月は寢待月見上げつつ歩むポストまでの路

子規逝きしかの立待月の年月すぎ今宵平成の寢待ちの月夜

寢待月臥待月とも思ひ見上ぐまだ雲の中のうす光の輪

いたゞきし志賀山寺萩咲き乱れ今朝吹く風に花零れこぼつつ

曾孫の二歳と五歳二たりとも弁口なりて帰りゆくはや

曾孫ら今日東京へ帰りたり萩の花こぼるる庭徑ふみて

しばらくは雨ふくむ風にこぼれ舞ふ萩の花の傍らにゐる

幼ながら宵の祭りに掬ひ来しメダカの三つメダカのあはれ

水甕にたった一つのメダカがゐる一つの命の泳ぐ姿よ

四次元

東京 今泉 由利

卷雲と高積雲との二重雲見あげてゆきぬ奥多摩までを

高層のビル建ち並ぶ街にして元なきさより八潮までゆく

いちばんに新しきまま過去となる東御の山に眠りし一夜

空だけの見えぬ窓のぬしにしてその時々その時々を

満月を取るとはいはず満月に向かひジャンプす今日も100回

不忍の池に咲き満つ蓮のうえ蓮月尼においでいただく

目に見えぬものは心に仕舞ひある父と母とをとり戻しつつ

四次元の縦横高さ時間をも自らのもの今日のやすらぎ

立方の檜柱目に探しゆくわが彫る先の地藏尊菩薩

円空僧神の御形を彫らると十二万體仏像残る

孫と子と

豊川 弓谷 久子

新しきノート今日より使ひをり心機一転とまでは行かず

孫と子が祝ひて呉れる我が誕生日すこやかなるを感謝せむ

心尽しのケーキと松茸弁当の八十九歳我の誕生日

長生の曾祖母の名を貰ひしと父は言ひにき我の名前を

染める事無き髪さっぱりカットして心も軽し身も軽し

慎重なみさと運転の車なり墓参りに行かむ彼岸真近し

赤き花に淡き黄色も二三本彼岸花咲けり我が狭庭にも

野良着姿の父と母との面影を恋ひて今日もこの畦に佇つ

雀等は稲田に行きしか餌台のパンはそのまま昨日も今日も

ホッホーと真近く鳩が啼き続く心おだやか今朝の青空

十年前の今日の自分に逢いたくて古き日記帳開きて見たり

椋の実

豊川 内藤 志げ

一畝の芋の草取りあと少しもうひと意気と涼しさの中

涼しさに芋の草取りあと少し時々痛む腹を思ひつつ

朝々にバケツに山盛り採りし茄子冷たき雨に小さき二つ

高速道の側道歩むは久しぶり草木を覆ひ葛の原なす

常の径色よく熟れし椋の実が遥かはるかを思ひつ歩む

椋の実を競ひ拾ひきその味も思い出いだせぬ遥かとなりて

窓々を閉めて小さき裏窓に廣き畑に見る土砂降りの雨

丸き背とほっそりと佇つ青鷺は番いならずやさみしげに佇つ

明日は雨日の暮れ刻に車にて生姜幾株を為京の畑に

用水の流れにざっくり土を落し面倒い生姜を明日は洗はむ

帰省雑詠

岡崎 林伊佐子

田畑でんばたも杉の木立ちに山と化なり離村して長き歳しのぶ

先祖より受け継ぎてこし田畑もわが世に終る時代の変遷

樹々の間にまぎれて立てる電柱のその終点がふる里の家

ただ独り畑に伫くひねもすを無言に足りるこころ安けし

昼の畑を耕やすわれを頻しきめぐりあかね蜻蛉は楽しくあらむ

一日の農仕事を終へて帰るとき隣の町は夕西さす

台風すぎ農事の重くかさなる中全滅近き野菜の手入れ

台風に色くろろずめる彼岸花こそより早きほろびの相すがた

去年の米まだ残りゐる収納庫老いの兆しに食減りにけり

この年の新米購ふ彼岸の日友と語らふ村の出来ごと

鉢巻

豊川 安藤 和代

夕づきて涼しさ覚ゆ庭に出て夫は目高に声かけており

すつきりと短髪にせし孫娘入試にむけてラストスパート

稲の花やさしく揺らす風にのり鈴虫の音かすかに聞こゆ

老いの不安友と語りて喫茶店グラスの氷片小さくくずるる

お隣に可愛い赤ちゃん産れたよ女の子だよ名前は「のあちゃん」

「美しき老い」等ほど遠くひたすらに今日一日を真剣に生く

玉葱の皮で染めたるTシャツのぴったり秋色黄色が光る

センター試験まで百日とサイダーをぐっと飲み干し鉢巻す孫

苦瓜の小さき実まで紅になりて今年の夏も終りぬ

敬老の日孫のくれたるラジオ聞く秋の夜長はまことに嬉し

隠れ蓑

大阪 伊藤忠男

這うように部屋中探す鑑識にドラマなくして本物なりや

植木鉢種植え秋を待つ日とて心急くかな涼やかな風

時告げるお寺の鐘の澄みし音遮るものの無き青い空

たどり着く先はどこかと杖たより息も絶えなん原谷峠

この難所踏み入れる人誰あるや落ち延び隠れ棲むはかの人

今もまだ残る風習迷信に妖しき祭り落人の里

千年の月日を刻む黒竹の気品誘う熊野の古道

待つ身とて待てぬ日もあり時と時合わせられずに時を失う

松茸の代わりにシメジ仕入れたり今宵は味にこだわるのだと

チンチンと鳴く声すれど姿なきどこにいるのかカネタタキムシ

曼珠沙華

横浜 阿部 淑子

長寿なる人の様をば見上ぐれば常に何かを追い求めおり

誰生ける卓上の花曼珠沙華広がる蕊の赤き精気ぞ

前夜から具材整え心込め利用者思う昼のスープよ

席立ちてふらつく友に血の気引き気づかうは卒寿ギブスの人よ

主^{ぬし}逝きて大木の栗切られしが根方に新葉みごと後継ぐ

仙人掌花

沼津 鈴木孝雄

海岸を枯れた草木で埋めつくす天城の大雨沼津で始末

ほろ酔いで家路千鳥の川堤涼風頬にマツムシ鳴けり

台風之余波の風強し駿河湾汗即乾く堤の散歩

向日葵の花は下向き葉は枯れる塩害被害を侮るなかれ

秋入りもいまだ盛んに花咲かすトマトの茎にハサミを入れず

里芋のネットの上を切り取ってのびのび伸びよと葉抑え除く

歩き方が格好いと褒められていつもより伸ばす散歩道かな

雨上がり黒松の林しつとりと根本に白き仙人掌花

降れば降る降らねば降らぬ日が続く極端天気年々増えり

雨雲のレーダー確認散歩に出る予期せぬ驟雨予報は予報

敬老

春日井 清澤 範子

愛知県に勤めし夫の受賞せし置時計確か時を刻めり

体調をみながら庭の剪定す夫は切る人吾拾ふ人

休み休み刈り込み鋏を握る夫小枝を所定の袋に入れぬ

雨戸を開ける度に思ひぬ体調良し小枝切り取る櫟いちいの垣根

人それぞれ長所ばかりのものでなく寡黙なるをも吾の長所と

よろける吾手を引く娘買ひてこし大根ことこと煮るよ今夜は

世の中は仕方なきことばかりなり苦が笑でも良し笑ひて暮らす

夫の弾くピアノの曲は演歌にて和みてをりぬ応接室に

敬老の祝ひ戴く町内の紅白まんじゅう夫と吾とに

蝉の声賑やかなれど夜半には虫の声聞き厨に立ちぬ

音羽川

豊川 白井 信昭

東より西御馬通る中にしてバンマツリ咲く夏の変わり目
艶めきてニオイバンマツリ道の辺に白紫の映えて美しうつく

めつきりと穂ほ孕み来し稲田の上赤とんぼ舞う台風の間を

夕間暮れ目には見えねど清かにも鈴虫聞こゆ頻り鳴く声

夕光かげの涼恋いて来ぬみ社の万葉史跡見ゆ鳥居の前

蛇だ行せし小本川ついに氾濫す激流は一気に津波となせる

夕波の立ちて輝く音羽川ほ頬なでる風心地良きかな

境内に幾つ植えられ檜達いく歳ならむ背丈は伸びて

太松のいく本ありにき境内の今に至りてひとつだになし

昨日までの暑さはどにへ朝起きの網戸にきたるこの清しさよ

夕顔

東京 森岡陽子

句会での詠まれし句真似てみるズッキーニに乗せチーズ焼く美味
嵐去る水かさ増えた目黒川速き流れに水鳥浮ぶ

木遣歌八騎の御輿並び行く日本人だなウキウキソヤソヤ

ミンミンとツクツクボウシと声混じる夏の終りか秋に成ったか

砂利道のぐるり登りの旧邸の玄関に立つ貫禄の公孫樹

夕顔や鶴せきれい鳩柄の訪問着大観画聖その妻に描く

種無しなしの大きな粒の葡萄食ふ枇杷もマンゴーも種無し思ふ

早々と雀は戻る住処の木一気に騒し秋の夕暮

こげ色の蓮の花托に種宿し破れ始めた葉の横に垂る

彼岸まで二十日余りと寺の道一輪早く彼岸花咲く

姫塚

蒲郡 杉浦恵美子

リビングに蟋蟀一匹出現す守宮が去りて初秋の夜更け

蟋蟀も独り居の友テレビ消して寝る間のひととき観察してゐる

ねこじゃらし掻き分け塚に手を置けばほのかに温し秋の陽帯びて

合戦の史実は如何されど此処に姫塚ありて秋の陽を受く

何時の世か哀しきさだめの女人あり塚の揮豪はまろやかなりき

あなたにはこの大きさが丁度よい小さき冬瓜呉れし人あり

片手にて持てる冬瓜貰ひ来ぬひとりの暮しはこれにて足れり

惜しけれど翡翠色の皮剥きをりぬ今宵のいのちを支ふる冬瓜

買物のレジの遣り取り束の間の話題にさへも秋の長雨

身近にも思はぬことの起こり得る長閑な暮しに小波が立つ

絵ハガキ

豊川 山口千恵子

水穂なる田の面青々広々しすいすいと赤トンボの群

てらてらと光るゴキブリ素早かり踏みつけむとす足元走る

台風の雨にダチュラも生き返る広葉の葉先枯れ色なるも

胸に手をおきて数などかぞへつついつか眠らむ眠りに入らむ

中国の人は素朴で朗らかです蘇州よりの桃子の絵ハガキ

留学し友達となりたる中国の子とこの夏休み旅してゐると

一枚の絵ハガキを見る祖父じじと祖母ばば幼きときの桃子を言ひつつ

過ぎ去りし七十余年の間には忘れゐしこと不確かなこと

彼岸花咲きゐる川の土手の道人々ぞろぞろ「ごんぎつね」の里

白抜きの楓一枚描かれし絵ハガキ届く若き人より

三輪山(1)

豊川 夏 目 勝 弘

飛べぬまで我が血を吸ひし小さき蚊よ腹八分目が命をつなぐ

裸にて簀に寝ることもあと幾日ぞ目覚めてフト三輪山に行かん

穂のい出ぬうちに稲を刈り取りて天日に干しぬ注繩の準備

注繩は蛇の絡める姿とかうま酒三輪のお山に登らん

三輪山の入山の条件を調べみる先生御夫妻も登られし聖地

百円の老眼鏡を買ひ替へて日本書紀また古事記を繰りぬ

三輪山の神なる巳みいさんに合へるかも猛暑に我がノウミノ弛む

この夏は蛇を見しこと一度もなし我が家の石垣の内に潜むや

三輪山の「神かみの峰」にて秋分の日ひのい出でくるを拝みてみたし

古代人の崇たかひ拝かみし太陽を我は遮かぎり書斎しよさいにこもる

亀戸大根

「月虹」

鮫島

満

戸を漏るる酒々落々の都々逸を歩幅狭めて耳に盗みぬ

半ばまで枕を引いてをれど嘘八百噺の芸に満ち足る

幕間あひを幕間まといふは誤りと言へる辞書あり言はぬ辞書あり

この路地も再開発の浅知恵に蹂躪されて道標倒さる

わが乞ふは亀戸大根塩をもて揉めるは秋の酒によく合ふ

川端の大き柳は覚えぬむたとへば女男めをの逢ひまた別れ

あるときはゴジラの影にあるときは駱駝の影に丘の木は見ゆ

朴葉焼きの肉を食ひつつ月桃の葉に飯包むみんなみおもふ

わがかつて十能買ひし燃料屋はいまだ残れど十能売らず

幻獣の跳梁跋扈を染め抜ける服着て大道芸人は飛ぶ

歌集 「夢のつづき」

水上信子

麦終えて秋蕎麦も終え一つ土地黒き地面に冬の陽が照る

一葉も残さぬ師走の梅の木の細き新枝はやみどりなる

多摩川を渡る電車の音たかく弔問のわれに旅心あり

昼席のまばらな客も少しずつ埋まりて小三治出囃子太鼓

真打のまくらは昨日の時事批判笑いをつれて江戸の長屋へ

中央線高架の完成五年後と生きる楽しみ一つ加わる

クメールの観音仏は千年の風化に耐えてほおえみ消えず

多国語のガイドの声の交差する寺院回廊風通る中

クメールの栄華の歴史刻まれし回廊に風涼やかに吹く

常夏の乾季の国を旅すればアンコールビル昼にも夜にも

私の一首

大決心とうとう別るる我愛車ひたすら歩こう明日からは

森岡陽子

今から五十四年前の十八才、高校生の時に免許証を取る。直ぐトヨタ社のパブリカ車が私の初めての愛車となった。コロナ車が何台か続いた後マークIIになりドライブを楽しんだが、年齢的にダイハツの軽自動車に乘換え、ついに平成二十八年六月六日に私の車との生活が終った。

豪華なる迎賓館の金箔と白い天井我も賓客

赤坂迎賓館。徳川家の屋敷跡の一部に、東宮御所として建設され、後に赤坂離宮、国立国会図書館等、公的機関に使用された後、迎賓館に改修された。そんな豪華な建物の中に敷かれた絨毯を歩き、今日は私が此処の賓客の気分で、ゆっくり優雅に楽しんだ。

『ハルカ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

上ノ郷の城の堀端見渡せば今は蜜柑の白き花盛り

スマホに替へ分からぬ操作を息子に聞く分かりさうでもまだまだ分からぬ

水野 絹子

わが作りし野菜のあれこれを持って行かむ君の笑顔がうかびくる

わが町の伝統受け継ぐ子供らの数は減りしも今宵のチャラボコ

牧原 規恵

二十年共に暮せし猫チビよつひに逝きたり我が腕の中
床につけば窓より見ゆる望月よ傷心のわれに淡き月光かげ

稲吉 友江

リフォームも間近となりて今宵磨く古きシンクにキズあといくつ

キッチンのリフォームつひにでき上がるここにて今朝の二人の珈琲

鈴木美耶子

棚経にわが家にお越しの住職と幼が交す「又会ひましよう」

康全寺の床の間の花蓮の花甘く清やかなその香ほのかに

吉見 幸子

平成に玉音放送聴きてをりテレビに向かひて国民の私
国民に理解求めて頭をも下げ賜ひたる天皇陛下

牧原正枝

したたりし汗を拭き拭き配達員言葉すくなにまた走りゆく
白き粒並び光れる唐黍の甘く拡がる私の口に

石田文子

鬼灯と櫛のみどり水桶に入れて新益までの間を待たむとす
初盆の父還りくるに灯を点す軒に下げたる迎へ提灯に

森厚子

夏の陽に紫蘇に染まりて梅赤く炎天の下かがやきてをり
満月の海に光の道生あれて歩めば君の黄泉の道かな

山崎俊子

ホトトギスのさへづり聞こゆ山間やまあひのブルーベリー畑のけふの日盛り
鶴折りて七つ八つと経机に並べてをりぬひとりのこの夜半

三田美奈子

現代学生百人一首

東洋大学

助け合いなくさめ合って支え合う人ってそういう生き物だから

鷗友学園女子中学校二年（東京都）

岩崎有莉沙

昼下がりに私のやる気を吸い取って入道雲はぐんぐん伸びる

学習院女子中等科三年（東京都）

本幡直子

ストローが君のものだと分かってても恋の予感を飲んでみたいの

慶応義塾中等部二年（東京都）

間仁田珠里

戦争は今年節目の七十年今も待ってる戦地の遺骨

駒込学園駒込中学校一年（東京都）

高石幹太

戦争をしてはいけないと訴える語り部さんの顔は必死だ

星美学園中学校一年（東京都） 倉林祥子

漠然と立ちはだかった高い壁巨人みたいに見おろしたいぜ

東京都立片倉高等学校三年 市倉望^{のぞむ}

じじの死後受け入れられずめくる本しおり代わりに私の写真

東京都立片倉高等学校三年 瀧口結^{ゆう}

数年後キラキラネームの祖父母増え孫に本名何と聞かれる

東京都立片倉高等学校三年 湯浅美^み魅^み

『俳句』

水澄むや崖に小さき観音堂

米田文彦

酔ふて見る鏡の中に我が秋思

ここにゐる高く振る手に芒の穂

柳散るゆるりとどぜう潜りけり

柳田皓一

蓑虫の顔の高さに我の顔

明け方や何を一途に虫の秋

朝日さすちちろの小さき屍かな

山元正規

穂薄の高さになびく夕日かな

東京の空高くして雁渡る

譲られし席をゆづりし敬老日

山迫京子

風にもつれ風に解かるる花薄

コスモスのひよろつと風に揺れやすし

秋雨や粹な傘ゆく木挽町

森岡陽子

さはさはと風抜ける先吾亦紅

草群るる土手にひと花螢草

四阿にひとつ鳴く声昼ちちろ

田中清秀

大根を月に見立てて新走り

秋風や醤油の垂るる串団子

間引菜のお浸し添へる朝餉かな
新豆腐三河の味噌の御御つけ
稔り田や一段一段山に入る

今泉由利

黒雲の解れつかの間月今宵

松本周二

狐尾の銀飛び交ふや芒原

台風の去りて近所の立話

三叉路の小さき洪滞凌霄花

植村公女

月今宵見知らぬ人とハイタツチ

泡立草流れてをりぬ風の道

秋高し吾白雲に乗らんと思ふ

夏目漱石

長けれど何の糸瓜へちまとさがりけり

枕辺や星別れんとする晨あした

累々と徳弧ならずの蜜柑哉

かたまって野武士落行枯野哉

かさね吟行会

「旧岩崎邸庭園と横山大観記念館」 九月

田中清秀

湯島天神は菅原道真公を祀り、修学旅行や合格祈願の子ども達が多い訪れる東京で一番の神社だろう。ただ、主祭神は天の岩戸を開けた「天之手力雄命」で、とにかく力の強い神といわれている。転じて今ではスポーツの神様としての信仰も厚い。今回のかさね吟行会はこの湯島天神に近い旧岩崎邸庭園と不忍池端にある横山大観記念館を訪れた。

平成二十八年九月九日十一時湯島駅に集合、いつものがらの快晴である。早めに集合した人は天神様を参拝、全員揃って旧岩崎邸へと向かう。入口正面にはイギリス人建築家ジョサイア・コンドル氏設計の異国情緒漂う洋館が堂々と迎えている。この建物は岩崎家の人びとの集まりや外国人賓客のゲストハウスとして使われ、ルネサンス様式とイスラム風のモチーフなどが取り入れられた華麗で優雅な建物である。現在国の重要文化財に指定されている。

黒雲の吹きとばされて野分晴

由利

藪茗荷咲きて昔の風そよぐ

周二

邸宅建物は洋館と和館そして撞球室の三棟が現存している。洋館の一階は食堂や厨房、応接間、二階に客室などがあり華やかな暮らしぶりが至る所に垣間見られる。特に一階のペランダにはミントン製のタイルが目地なく敷き詰められ、二階の客室には金唐革紙の壁紙が貼られて繊細で優美なつくりが人目を奪う。また、バカラのガラス器には芳醇な高級ワインが注がれたことであろう。

由緒ある暖炉のひびや秋扇

素山

重陽や金唐革に光る花

文彦

岩崎邸めぐる間の汗秋暑し

善恵

洋館と結合された和館は岩崎家の人たちの居住部分で書院造を基調とし、当時は建坪五百五十坪あり洋館よりも大きな建物であった。現在、広間ではお茶席として抹茶と和菓子が用意され庭を眺めて頂くことが出来る。広大な庭園は江戸時代に越後高田藩の屋敷が有ったことから大名庭園の名が残され、芝庭との組み合わせは近代庭園の代表的な様式だったようだ。

秋の蟬古木の囲む大名庭

陽子

つくつくし時の風吹く旧庭園

京子

三角の屋根が特徴的な撞球室はビリヤードを行う建物でスイスの山小屋風の外観は当時の日本ではとても珍しい、なぜか地下道で洋館と繋がっているのも秘密めいた雰囲気を漂わせている。屋根の周りにも細かい装飾が施されジョサイア・コンドル氏のこだわりが現れている。また、氏の教えを受けた辰野金吾氏は東京駅舎や日銀本店の建築設計で有名である。

我が背丈なついて廻る赤蜻蛉
築山に小さく鳴きて昼の虫

皓一 さち子

庭園の一角の木陰で一息入れ、豪華で雅な建物と庭園の見学を仕舞とし、邸宅を出てさらに不忍池に向かつて散策を続けることとする。

横山大観は大変な酒好きとして知られ後半生は飯をほとんど口にならず酒と肴で済ませていたと言う。大観が明治四十二年から八十九歳で没するまで、多くの作品を描いていた居宅が横山大観記念館として不忍池の近くに残っている。一階が居間と客間、二階がアトリエである。また、狭い中庭には花梨の太木が植えられている。和風建築の雰囲気を生かし、大観の絵画や習作とスケッチ、陶器の絵付けなど多岐に亘り展示され、そのまま展示スペースとして公開されている。因みに飲んでいた酒は広

島の「酔心」で大観と意気投合した酒造元から一生の飲み分を約束され無償で送られていたという。画風の朦朧体は線描を抑えた独自の没線描法でお酒に酔いながら描いたのかも知れない。

中庭に熟しきらずや花梨の実
敗荷の閉じ込めてゐる池の風

清秀 正規

蓮の大葉に覆われた不忍池を廻り秋暑の強い日差しを浴びながら、西郷銅像の近くの中華料理店「旦那楼飯店」へと昼食に向かう。この店は食事に引き続き個室を句会に提供して貰える、嬉しい限りである。囑目三句、もう一度今日歩いた道を思い出しながら句作に集中する。

■かさね吟行会■

日時 十一月十一日(金)

場所 雑司ヶ谷近辺

集合 JR大塚駅 十一時改札口

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』（五五）

丸山 酔宵子

『日本のお盆と送り火と』

連日リオ・オリンピック中継に一喜一憂している熱い夏であるが、八月ぐらい日本の歴史と伝統と故郷をドラマティックに思い出させてくれる季節はない。広島・長崎原爆記念日、終戦記念日、甲子園高校野球の熱戦それが今年、山の記念日が加わり、半月の間にいろいろな感慨が心に甦ってくる。更にとどめは、13日から始まる「お盆」である。

お盆はもともと、米・麦など畑作の収穫を感謝し、秋の結実を祈る農耕儀礼など古くからのしきたりが仏教と結びついたもので、地獄で逆さ吊りにされる苦しみを表

すサンスクリット語「ウラバナナ」からきた「盂蘭盆」（うらぼん）が名称の由来だそうだ。お盆の時期は、8月13日から16日にかけての「月遅れ盆」で、故郷へ帰省し先祖の成仏を祈る風習が現在も続いている。

故人の靈魂がこの世とあの世を行き来するための乗り物として、「精霊馬」（しょうりょううま）と呼ばれるきゅうりやナスで作る動物を用意し、戸口に火を灯して先祖の霊を迎える。きゅうりは足の速い馬に見立て、あの世から早く家に戻ってくるように。ナスは歩みの遅い牛に見立て、この世からあの世に帰るのが少しでも遅く、そして供物をたくさん牛に乗せてあの世へ持ち帰ってもらうとの願いが込められている。この様な日本の原風習は、昭和30年代ごろまでは都会でもよく見られた光景であったが、昨今では全く目にすることはなくなった。しかし、都会を離れた過疎化が進む田舎では律儀に伝統を守って

いる。また、お盆と言えば、寺社の境内に老若男女が集まってくる。また、お盆と言えば、寺社の境内に老若男女が集まっての盆踊りが行われるが、これは地獄での受苦を免れた亡者たちが、喜んで踊る状態を模したそうだと。か・・・。

送り火や遠い太鼓にカップ酒

酔宵子

お盆の最終日には送り火を灯して先祖の霊を見送るのであるが、京都五山の送り火も、火を焚いて精霊を鎮める万灯（まんどう）の行事が原型で、京都の夏の風物詩「五山の送り火」が毎年8月16日、午後8時から行われ「大文字」「妙法」「左大文字」「船形」「鳥居形」と呼ばれる5つの炎が、市街を取り囲む三方の山肌に浮かび上がる。都人はさすが粋人で、この送り火を、盃に盛った酒に映して飲み、無病息災を祈るのだそうだと。

祇園の料亭で舞妓のお酌でならかなうことであろうが、居酒屋立ち飲み常連風情では・・・。遠くから、盆踊りの太鼓が風に乗って聞こえてくる。せいぜい風呂上りに、供え物のカップ酒で先祖の弔いと行きます

本からのあれこれ (12) 米田文彦

「ある保育園と園長の足跡②」

ここで、託児所運営に協力している婦女会員の奉仕について見てみる。

子どもの保育に資格を持つ保母さんに支払う給料はもとより、運営費・拡張費等は助成金・寄付金の他はすべて、堀田くにははじめとする婦女会員の労益によつて賄う他なかった。第二保育所建設の際には、催事を行う工場の要望に応えて、婦女会員三十人は夜一睡もせずに寿司を作り続け、三千人分を時間通りに届けたという。商人にも負けない、顔負けの根性と言えようか。

何しろ労働時間の制限などない時代である。夜も昼も日曜日もない託児所であった。

昭和十六年日本は米国との戦争に突入する。

伏木には約二万人の部隊が駐留し、港湾はすべて軍の指揮下に置かれる。婦女会員は勤労奉仕に出掛けて託児所を省みる余裕はなかった。企業から時々あった援助金

も途絶え、子どもに与える食料は思うように手に入らなくなる。所長であるくにもしばしば託児所閉鎖を考えたが、朝、母親に連れて来られる乳幼児の顔を見ると心を奮い起こさざるを得ない日々だったという。どこかに相談に乗ってもらう術もなく、状況でもなかった。

苦しい経営は所長の私財をもって何とか賄う他なかった。

昭和二十年の或る日、朝鮮から病院船が伏木に入港した。たちまち第二保育所は陸軍病院として接収され、憲兵が立ち、所長も立ち入りが禁止される事態となる。そして終戦。そこは板という板はすべて剥がされていた。何かに利用したらしい。無残な廃屋となったまま第二託児所は閉鎖止むなしとなった。

戦後の食糧難は多くの子どもを抱える託児所にとつて大変な問題となった。自分の家族にさえ満足な食料などない時代、婦女会員に助力を頼むのも無理であり、所長は保母さんたちと買い出しに奔走したという。

ようやく平和な時代となった。

昭和二十三年、託児所は生活保護法の伏木保育所とし

て厚生省の管轄に入り、初めて婦人会の手を離れる。

今まで無給だった所長にも初めて給料が与えられた。

昭和三十三年、社会福祉法人となり、くにを初代園長として伏木保育園が新しく発足した。以来、保育園は現在に至るまで地域の信頼を得て子どもたちの保育に励んでいる。

そして、くには昭和五十六年まで園長を務め、六十年に九十七才で亡くなった。

くにが伏木の婦女会長に推されたのは自身の産後すぐの頃であったが、生まれた子は男子で長じて小説家になり、一九五一年「広場の孤独」で芥川賞を受賞した。

堀田善衛である。主な著作に「方丈記私記」「ゴヤ」「定家明月記私抄」などがあり、深い思索と行動で知られる。

「方丈記私記」の冒頭で善衛は、「私が語ろうとしていることは、実を言えば、われわれの古典の一つである鴨長明「方丈記」の鑑賞でも、また、解釈、でもない。それは、私の経験なのだ。」と書き始めて、昭和二十年三月九日の東京大空襲の体験、記憶を数ページに渡って述べ、方丈記の書かれた戦乱の時代へと連想を展開していく。

エッセイ「鶴のいた庭」では、彼の生家である伏木の廻船問屋について、持ち船の帰港を遠望する為にある最上階の望楼、そこに年数回は上る曾祖父、大きな池のある庭に飼っていた「千」と「萬」という鶴の世話をする老人、家の斜陽化と債権者会議の頃の不安、などを書いている。

殊に廻船問屋というものの家の構造、船が帰ってきた時の家と町の賑わい、などは興味深く、また変遷に流されてゆく旧家の老人としての曾祖父像は哀れが深い。

このエッセイでは、飛行機が山を越えて飛ぶ姿を初めて見て、ブズブズブズというエンジン音を聞いた善衛少年が、「どこへ行くのだろう」と疑問を抱いたことが描かれている。この「どこへ行くのだろう」という疑問、不安は善衛が大人になり年を重ねた後も、折に触れブズブズブズという音と共に湧き上がってくるのだった。

母、くにには善衛のことをあまり多くは語っていないようだが、「あの子は小遣い以外に無心を言う子ではなかった。貯めた小遣いで漫画の本を買っているのを知り、健気に思いました」とだけ述懐している。

ある自然科学者の手記 (54) 大橋望彦

『意志の伝達』

「オンライン……」という言葉を聞くが、例えばオンラインチャットはいわば無線を使つてのお喋りで、「オンラインシヨブ」や「オンラインゲーム」も同じようなインタラネットを使用した、便利と同時に寂しい人間の逃げ処ともなっている。こんなのつて、昔にはなかったな。これらは人間同士のコミュニケーションの方法が増えたことに由来すると思える。しかも、人間同士とは「見せ掛け」で、人間と機械との間のコミュニケーションに変化が与えられているのに過ぎない。しかし、現実にはしっかりと機械が人間とのコミュニケーションを果たしている。それと同時に人間が機械になったのか、相手を無視することもコミュニケーションの方法の一つとして加えられている。即ち、無視して何も相手にならないことは、一番ハッキリとしたコミュニケーションの一つなのである。ところが、このコミュニケーションも、人間同士の場合には、そこに無視するという動作がハッキリとしていて、侮蔑、悪意、見下す、等の意味合いが含まれてくる。これが若者たちの「イジメ」の方法の一つにも用いられたりもする。一方、機械の場合は、故障であつたり、受話器を取るのが一寸遅かつ

たりした為に生ずる、意思のない、無視的行動となることも多々ある。この場合でも、相手は、機械的事由によりコミュニケーションが取れなかったのに、無視された。と、一方的に解釈してしまう。もつとも、実際に電話に出ない、いわゆる居留守を決め込む人も中にはいるであろう。これが本当の侮蔑行為の本尊なのであると思うが……。

この様に、コミュニケーションの手段も増えることは、文化の発展とも解される。その典型的な例が、電話の出現である。昔では、どんなに遠隔の地であつても、その地への連絡手段として、文書を持参してもらつ「飛脚」という手段があつた。アメリカのようにとつてもない遠い所では「駅馬車」という手段もあつた。これらも自分以外の力を借りたコミュニケーションの二つの手段と考えることも出来る。それが電話では、まるで目の前で話し合つてるように、リアルタイムでのコミュニケーションが出来るのである。しかし、それでも留守番電話等という一方的な言い分で済まされる手段も出てきた。コミュニケーションも利用され方によつて変わる姿も多様化したものである。

『意志疎通』という言葉があるが、これほど難しい言葉はない。思つていことが、相手に正直な意思として伝わっているか否か？ 面と向かつて話をしていても、それがお互いの意志通りに繋がりが合わないことも多い。相手が外国人（国内でも、地方々々でそれぞれ特有の言葉があつたりするので、

それらも含め）であれば尚更のことである。これは二つには、ボキヤブラー（的確な単語を知っている数によって、表現力に差が出てくる）に基づくことが多いが、またそれとは別にあまりにも単語を良く知り過ぎて、普段あまり使われない言葉が多くなるとウットウしい。その二つとして、カタカナ用語となると、筆者のような古い人間には、チンプンカンプンとなってしまう。特に、外国語をその読み方に準じて日本語化して、それを仮名文字で表し、しかもそれを適宜省略された言い方でカタカナ語として用いられたりすると、もうこれは知り様もなく、若者たちに説明を求めざるを得ないのである。例えて云えば、もう可成り一般化していて、古い言葉になつてはいるが、「ラジカセ」がある。

ラジオとカセットレコーダーの合成語で、完全な和製英語と言える。そのそれぞれの言葉を簡略化してレコーダーは省略してしまつた。其れでも完全に意味は通じている。これは完全にカタカナ語として定着しているのである。「スマホ」（携帯電話機の二種）もその二つ、スマート・ホンの和製語を簡略化した新名詞である。

タイムスリップが速くなつた昨今のことであり、言葉の進化もそれなりに速くなつてると云えば、それまでのことではある。

これらの意思の疎通が難しいのにもかかわらず、一方で、千年の歳月が隔たつた世界であつても、その意思がハッキリと

伝わる世界もある。詩歌の世界である。言葉として誠に微妙な意味を持つにもかかわらず、ピツタリとした気持ちまでが伝達されるので、極めて精巧な機械以上に伝達機能を持つのに驚く。もつとも、言語とともに発達してきたコムニケーションの手段に、文書の発達がある。象形文字から始まつて、複雑な漢字やアルファベットを用いたり、いろいろな地方で言語を記載できる文書が発達してきている。この文書のやり取りから、物事の伝達がより正確となり、正確性が最も大事なコムニケーションは、文書として記録保存されるようになってきた。これが憲法であるとか、条約であるとか、契約書として、または恋文として、証拠書類なるものが存在することとなる。その為にも公用語なるものまで出現する。將に雁字搦めのコムニケーションと言える。

『意志疎通』とよく似た言葉に『以心伝心』という表現があるが、これは、全て相手の心を見透かす様に、その意思は何も言わないのに、すつかり通じ合つてしまふことを示している。これは一体どういふことか？人間同士は、全ての人が「以心伝心」でコムニケーションし合えると、言語は忽ちのうちに退化してしまふであろう。現在の若者たちの言葉の簡易化は、もしかして、その前兆なのだろうか。言葉の進化は、退化と同じ？？？

『意志の伝達』のメカニズムは完全に分析されているのであろうか。実に不思議な世界である。

絹の話 (72)

「アトリエトレビ」 今 泉 雅 勝

絹の販売現場質問特集

絹の販売現場にいるとお客様から色々な質問が来ます。
多い順に列挙してみます。

洗濯はどうしたらよいですか?.....70号既述
アイロンはどうかかけたら良いですか?.....70号既述
生糸の絹と紬、紡ぎの絹とどう違いますか?.....71号既述
この素材は麻ですか?.....71号既述
それではつむぎが高いのはなぜですか?.....71号既述

この中に何が入っていますか?

野蚕といわれる絹には沢山の種類が有りますので、私共は日常使用している各種繭の見本を展示しながら、販売しています。繭を横目で捉えると年配の方の多くは「マー懐かしい」と言って、足を止め繭生産が盛んな頃の自分の体験を語り始めますが、都心のデパートでは老若会わせて2割位の人が写真や話では見たり聞いたりした事は有るが、実際に手にとって見るのは初めてという

人がいます。この人たちは必ず繭を耳元で振ってみて、「この中で音がするのは何が入っていますか?」と聞かれます。「この中には乾燥してカリカリになった蛹が入っています」と答えると、一瞬ギクつと身構え、一部の人は「キヤー気持ちが悪い」と言って繭を放し、売場を去って行きます。そうでない人は「中の蛹は死んでいいのですよね!」と念を押して他の野蚕の繭の観察を始めます。

「絹製品が好きだ!」と云うお客様も含めて、来客女性の8割位は虫が嫌いの様ですが、男性の虫嫌いは殆どいません。時々女性でも蚕が可愛くて、手の平に載せると冷たい感じがたまらなく愛おしいとおっしゃる方もいらっしゃいます。女性の好き嫌いの中は男性に比べて非常に広く深い事を感じさせられます。

これは着色した繭ですか?

売場の目立つ所に野蚕の各種繭が展示してある中で、グリーン繭の繭(天蚕)に目を留め「この繭は着色したものでですか?」とよく聞かれます。「この繭はクヌギやブナなどドングリのなる木の葉を食べて日本の夏に育つ、絹のダイヤモンドといわれる天蚕という繭です。」と答えると、反応は様々に分かれます。

「へー、カイコは食べるものによって繭の色が変わるのすか?」カイコは桑の葉を食べるものとはかきと思っていました。」

「カイコ(蚕)とよばれる虫は一般に皆様が慣れ親しんで来た白いカイコガ科の、家畜(ニワトリでいえばブロイラー)化した昆虫で、山野に生息するヤママユガ科やその他の絹糸昆虫は生息する場所や照射日光(特に紫外線)の強弱によって、緑色の繭であればフラボノイド、茶色繭であればタンニン、黄色繭であればカロチンといった色素を吐く糸に混ぜて繭を作り、外敵からカモフラージュして食害から身を守り、子孫を紫外線などによって突然変異を起こさないようにする生命維持カプセルです。」と答えて、「こうした繭から作る絹を着る事によって、人も計り知れない健康維持の恩恵を受けるのです。」と一言添えると販売に繋がります。

この繭の糸は緑色になるのですか?

「この天蚕繭から薄グリーン色の糸を作ることが出来ません。」着物の世界ではこのグリーン色を愛で、シルクのダイヤモンドと称していますが、長時間直射日光に当たり続けると次第にグリーンが薄れ、黄色くなつて来ます。」洋装の世界では洗濯や直射日光にさらされる頻度

が高いので、脱色によるトラブルを避けるため糸の外側にグリーン色の色素のあるセリシン部分(未精練の2割強、お米でいえば糠に当たる部分)を取り除いて製品を作ることが多いですが、その糸は同じファミリーのインドのタサール蚕や中国の柞蚕と判別がつきにくい糸になり、差別化がしにくく、天蚕糸は家蚕糸の数十倍もする素材ですので、和装以外にはストールくらいのは使用されていません。またこの素材を織る機は和装用の小幅が殆どなので、洋装用には利用不向きです。」と答えます。

この様な話をするとなんか人は「今日は、ここを通りかかって、良い話を聞いて良かった。こんな説明をして下さる百貨店は初めてです。」などのリップサービスを頂くことが多いです。「今度はいつ来ますか?是非連絡を下さい。」ともよく言われますが、昨今の百貨店では個人情報問題で、お客様の住所を貰う訳にはゆきませんので、私共の住所を渡しますが、二階から目薬に様な効果になってしまいます。

デパートの不振はこんな所にもある様な気がします。百貨店には品物は有つても、心を満たす情報が有りません。買い物のお楽しみ、販売の付加価値はそんな所にもあると思います。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人― 六十二回

〔月虹〕 鮫島 満

十八 橋本徳寿 1

橋本徳寿は大正十四年、三十一歳でアララギの古泉千樫に入門、その翌年千樫のもと青垣会を創立した。

たのむぞとこの世にのこるよき友にひとをしりぞけてわかれをとどむ
『海峡』昭和十五年刊

立ちあがり去りゆく友を目に追へる師の意識かなし
あきらかなりき

「古泉千樫先生を憶ふ」と題する一連のうち、「臨終の床に斎藤茂吉先生見舞下さる 二首」との題詞をもつその二首である。

一首目は主語が分かりにくいのが、千樫が見舞いの人に席を外してもらって茂吉に「たのむぞ」と言つて別れをしたというのであろう。千樫は茂吉よりも先に伊藤左千夫に入門し、左千夫を中心に発刊した「馬酔木」を扶け、続いて茂吉等と「アララギ」へと発展させた。「たのむぞ」には歌壇の今後と、徳寿らと創刊した「青垣」への支援

を願う気持ちがかもつていよう。

二首目は、見舞いを済ませて立つ茂吉を「目に追」う千樫の意識はまだ明瞭であったと詠まれている。

この歌が詠まれたのは昭和十三年であるが、千樫の没年は昭和二年であった。作者には、千樫にとつて茂吉が偉大な友人であったとの思いが年々強まるのであるう。

ひたぶるに作るわが歌をよしといふよきひとの前に
おしいたきぬ
橋本の歌にはいまだおどろかずと茂吉先生にゑみみ
すゑらる

この二首は対になるものとしてとらえて「よきひと」が茂吉を指していると理解したいが、「雑歌」と題するこの一連には、この歌にかかわる歌が前後にないため、一首目の結句「おしいたきぬ」の目的語が実はよくわからない。「わが歌をよしといふ」茂吉の言葉のことであるのか、それとも、昭和十四年に大日本歌人協会から第一回作品賞を受けた時、

「……この協会賞に対して斎藤茂吉先生が、
たましひは流るるものぞ天ゆくや地ゆくやなべ
て止まらなくに
の祝歌をくだされたことは、忝い記念としてふかく
感銘してゐる。」

と「巻末記」に記している茂吉の祝歌を指しているのが考えられるが確かではない。

二首目の結句はわかりやすく書けば「笑み見据ゑらる」であろう。にこやかに見つめられたというのである。

こう考えると、この二首は右の授賞式の折の歌ということになるようである。

かなしみにのみどつまりてきさらぎのつめたき雨の道をあゆめり 『ラン草房』昭和二十九年刊
門前をとほる童子にきかれたり『寝てて死んだのか』とわれきかれたり

昭和十八年二月二十五日に没した茂吉の通夜に参ずる時のことを詠んだものである。以下、「噫齋藤茂吉先生」と題する一連十七首を読むことにする。

赤彦に千櫛百穂憲吉につぎつぎ死なれ老いたまひけり
同

この歌に詠まれた四人の没年月日は、

島木赤彦 大正十年三月二十七日

古泉千櫛 昭和二年八月十一日

平福百穂 昭和八年十月三十日

中村憲吉 昭和九年五月五日

である。こうしてみると、「アララギ」の基礎を築き発展させた功労者のすべてを茂吉は十年のあいだに見送っていることが再認識される。因みに正岡子規は明治三十五年九月十九日に、伊藤左千夫は大正二年七月三十日にそれぞれ没している。作者は「つぎつぎ死なれ老いたまひけり」と詠んで、この間の、そしてそれ以後の茂吉の苦しみ悲しみを「老い」の語で表しているが、これ以外の言葉はないということが言えるかもしれない。

ひたぶるに赫怒されたとほぎ日のまざまざとしてうつしみはなし
同

茂吉の「赫怒」の内容はわからないが、それは「ひたぶる」なものだから、作者にとつては忘れられるものはなかったのであり、それは「まざまざ」と「甦つてももの狂おしくなる」というのである。

アララギ発行所の表札をぬすみ来て君が字のうへを撫でつたのしみつ
同

まさか茂吉没後のことではあるまい。「たのしみつ」ともあるから、ずいぶん前のことであろう。

楽しい時間 48

山本紀久雄

2016年9月30日

縁あって、娘が、大阪市西成区のスナック店内の段ボールで生れ、飼われていた、生後二か月の雌猫をもらい受け、「ミーコ」と名づけ、一年半が経過した。

「猫を飼ったら」と娘から提案を受けた時、面倒見られない可能性が高いので、簡単には「ウン」と言えなかった。

ジム仲間で近所の親しい主婦に、猫を飼うことを相談すると「ウン。難しいね。猫は結構長生きするのよね」と首を傾げる。当方と、猫の年齢を比較し、その後の生存期間を頭の中で計算しているのだ。

「なるほど」と思い、次の土曜日に、というのも娘は毎週土日に来て、家事一切を仕切ってくれ、テーブルの上にはたくさんの料理アイテムが並ぶので大歓迎で、助かっており、いつも感謝しているのだが、娘にジム仲間主婦の見解を伝えると、「そんなこと大丈夫。そういう時は私が面倒見るから。それよりもお父さんのボケ防止対策よ!!」と、明確で厳しい言。数日後、新幹線のぞみ号でミーコはやって来た。

家に来た当時のミーコはすごかった。テーブルと調理台の上、天窓の縁、階段やベランダの手すりまで、至るところ自由奔放に跳び上がって走り回る。スナックでもカウンターのの上を走り回って、猫カフェを期待してくる客に、お世辞を振りまいていたに違いないと思えるほどの所業行動が連続して続く。

特に厳しいのは、食事時間のテーブル上にある料理を狙って、床から跳び上がって、ダイレクトに皿を直撃し、口に入れたら絶対に離さないこと。まるでアルカイダの攻撃のように鋭く、素早く、四方八方、どこから来るか予測困難という状況に、困り果てて、ミーコの伯父さん、つまり、ミーコの母猫の兄弟にあたる猫を飼っているカナダ人に相談すると、「しばらくすると落ち着きますよ」との答え。

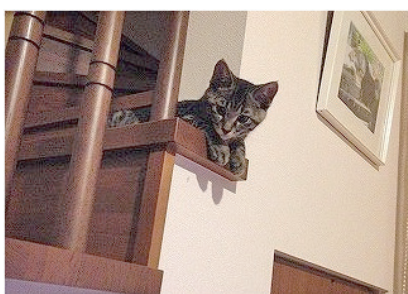
本当かなあと疑問持ちつつ、一年間のミーコとの格闘食事時間帯を過ごしたところ、見事に最近ではテーブルの上には上らなくなり、空いている椅子の上で静かに座っているだけで、攻撃はピタリと止んだ。

刺身や焼き魚がテーブル上にあつても、それをチラッと見るだけ。誠にお利口になったので、いい子だと頭を撫ぜる毎日で、ようやく平和で静かな食事ができるようになった。

猫も年齢とともに進化するの
か、と感じ入っているところ。

次に、最近のミーコ変化は、当
方が外出する際に、ジッと見つめる
ようになってきたこと。玄関内の三
和土壁際や、階段の途中から、顔
だけ向けて「私を置いてどこへ行く
のだ」とばかりの眼をする。

さらに、帰った時は、必ず、ド
ア内の一番外に近いところに蹲ってい



て、ドアを開けると、体を反転させ、喜び表現動きをする。

これが可愛いので、荷物が無い時はだっこしてあげるが、いつもドア近くにいる状態から考えて、猫は音に敏感なのではないかと推察しているところに、日経新聞「かがくアゴラ」(2016年7月31日)に『ネコは耳で考えている』の記事、これは京都大学文学研究科大学院生・高木佐保さんが取材受けた内容が掲載されたので、少し長い以下、引用紹介したい。

結論は「認知科学の手法では、ネコが重力の仕組みを理解している」とのこと。つまり、ネコは物理法則を理解しているという、ネコが持つ興味深い能力を明らかにしたわけ。

「——なぜネコに興味を持ったのですか。

子どものころからネコやイヌは言語を持たないのに頭の中でどう考えているのか疑問に思っていました。大学では心理学を専攻していたところ、生物が進化する過程で心がどう発展してきたかを探る『比較認知科学』ならわかるかもしれないと思い、大学院では霊長類の研究をしている京大の藤田和生教授の研究室に進みました。

——実験はどのように進めたのですか。

人間の赤ちゃんの認知能力などを調べる方法を応用しました。期待(予測)していた事実と違うことが起きると、驚いて注目する時間が長くなることから、頭の中で物事をどれくらい予測しているかを調べる方法です。

実験では弁当箱に入れた鉄の球を左右に振って『ガラランガラ』という音を出した後、箱をひっくり返して球が床に落ちたときにネコがどれだけ箱に注目するかを調べました。箱の中に電磁

石を取り付け、遠隔操作で電磁石が働いて鉄球が箱にくっつき、振つても音が鳴らなかつたり、ひっくり返しても落ちなかつたりするようにしました。手品のように予測と違う結果が出たときに、どんな反応をするかを調べるためです。

——実験結果はどうでしたか。

猫カフェの協力を得て30匹の猫で試したところ、予測と違う結果が出た場合に箱を見る時間は約2倍長くなりました。ネコが予測外のこと起きると、驚いて注目したと考えられます。

——実験結果から何が分かりますか。

ネコは物が動くと言が鳴ったり、ひっくり返すと下に落ちたりする重力の仕組みを理解していると考えられます。こうしたネコが認知する能力を科学的に明らかにできました。実験結果をまとめた論文をドイツの国際的な比較認知科学雑誌に投稿したところ『ネコが物理法則を理解している』と紹介されました。

ネコは視界の悪い場所でも音を頼りに待ち伏せして狩りをし、聴覚が優れています。耳には約20の筋肉があり前後左右に動きます。人間や霊長類と違い、視覚より聴覚で多くの情報を得て認知したり物事を予測したりします。耳でどのように考えているのか知りたい。

ネコの認知機能をもっと科学的に明らかにし、ネコと人間の関係をもっとよくしたい。今後はネコを飼っている方にも協力を呼びかけていきたいと考えています。」

——ミココは当方の足音、又は、門の鍵を開ける音を聞き分け、暗い三和土内で待つことができるのだ。ミココの耳を改めてよく見ると、中に細い毛がいっぱいある。成程と思った次第。

漢詩研修

平井茂行

廬山瀑布望
ろぜんのばくふをぞま

李

白

日香炉照紫烟生
ひはこうろをてしえんをしょうず

遙看瀑布長川挂
はるかにみるばくふのちようせんをかく

飛流直下三千尺
ひりやうちようかさんせんじやく

疑是銀河九天落
うたがひはぎんがのきやうてんおち

【解説】 南京で安祿山の叛乱（天宝十四年 七五五年）を知った李白は河南山東あたりにいた家族を江南に呼び、翌年には妻とともに南に避難する。

江西省九江県の南にある廬山に行くことにした最大の理由は、洛陽を中心とする中原一帯に戦火が広がったためと思われる。肅宗が即位し年号が変わった至徳元年 七五六年秋、五十六歳の李白は長江中流をさかのぼり、廬山五老峰のふもとの屏風畳に隠棲する。そしてそのまま静かに隠棲すると思いきや、年末には肅宗の弟、永王りに招かれ永王の安祿山討伐軍に参加してしまふ。そして結局は肅宗と永王の反目から永王軍も叛乱軍として征伐されてしまふ。

きわめて短い廬山の隠棲期に作られたのが二首の「廬山の瀑布を望む」である。一首はこの七言絶句であり、もう一首は二十二句もから成る五言古詩である。五言古詩も滝の様子を別の角度から生き生きと描いている。

同時期に「廬山の五老峰を望む」も作られている。

李白が詠んだ香炉峰は廬山の東南にある峰なので南香炉峰と呼ばれ、清少納言の「枕草子」をはじめ「源氏物語」「大鏡」等日本の古典文学に多大なる影響を与えた白居易の「香炉峰下の山居」（本当の詩題はもっと長い）（八二七年 四十六歳の作）の香炉峰は、同じ香炉峰ではなく、廬山の北部に位置するので北香炉峰と呼ばれている。

李白の詠った瀑布は千二百年を経た現在も当時と同じ様に水が流れ落ち「黄岩瀑布」の名がある。「飛流直下三千尺」と李白独特の豪快な描写をしたが、その表現は誇張を感じさせない。実際に流れ落ちる高さは、その半分ぐらいかもしいれないが、滝は溪谷の間から流れ落ちるのではなく、山の峰から断崖を流れ下るので、滝つぼ近くから仰ぎ見ると壮観きわまらない。

【語釈】 *廬山：…長江中流の東岸、江西省九江県の南にそびえる名山。

最高峰の漢陽峰は標高二四七四m。中国屈指の景勝地で、香炉、蓮花、双剣、天池、石耳、擲筆、鶴鳴などの諸峰があり、林立する奇岩、秀峰、溪谷、滝、山麓の湖が独特の景観を呈している。多くの峰からなる山群の総称である。廬山（中国読み ルーシャン）は南北に長く約三〇km。東西二六kmほどの広さがある。中国人の山の嗜好は奇岩奇峰に向けられることが多い。匡山とも言う。陶淵明の隠棲地。一九九六年、世界文化遺産に登録された。

*香炉：…廬山の東南にある峰。南香炉峰を指す。峰の形が香炉に似ているところからこの名がある。白居易の香炉峰は北香炉峰を指す。

*紫烟：…山気が日光に映して紫色にかすんでいること。烟は香炉の緑語になっている。廬山のあたりは雨が多く霧が多い。夏にはしばしば雷雨が発生する。そのため雲海の上にな山々がそびえ立つ光景が見られる。

*桂長川：…落下する滝がきわめて長いため川をたてかけたように見えること

*三千尺：…非常に長いことをいう、実数ではない。白髮三千丈（秋浦の歌）李白特有の大胆な誇張表現。

*疑是：…かと思まごうばかり。

*銀河：…天の川

*九天：…天の最も高い所。「九重の天」「九霄」ともいう。

【通釈】 太陽が香炉峰をさんさんと照らしている。その香炉峰は紫色にかすんでいて美しい。遙かあなたに大きな滝が、長い川をたてかけたように流れ落ちているのが見える。その滝は飛ぶようにまっすぐ三千尺も流れ落ちている。まるで、それは、天の川が天空から落ちているようだ。

【鑑賞】 前半の二句は大きな滝を遠くから眺める。起句は「香炉」に対して「烟」というように縁語を用いて、廬山の美しさを写生している。転句はスケールの大きな滝のさまを思いついた表現で描く。後半の二句はこの詩の見どころである。南香炉峰にかかる滝が飛ぶようにまっすぐに下って三千尺。「三千尺」とは約九百m。そんな滝はあろうはずもなからう。それをあえていうところがおもしろい。この詩のミスは、この句の着想の奇抜さにある。こういう着想は、李白の独壇場である。三千というのも、李白の得意な表現であり、また、結句の「銀河の九天より落ちるか」とも李白の本領を発揮している。李白の詩は自由奔放で勢いがよく、奇抜な着想に富むところに特色があるといわれているが、この詩にもそれがよく表れている。

この詩は、後世は絵の題ともなっている。鐘礼の「観瀑図」や相阿弥の「廬山観瀑図」はその代表作である。

世界遺產 廬山
(中華人民共和國)

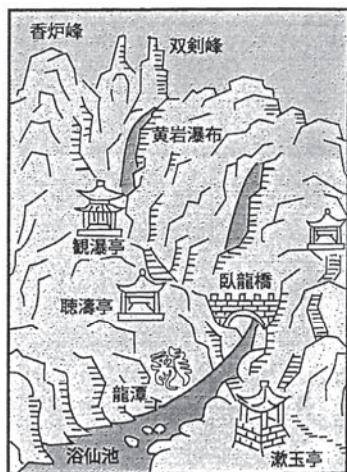


廬山

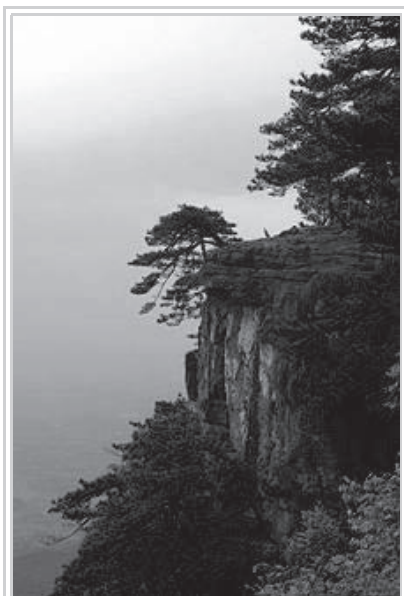
英名	Lushan National Park
----	----------------------



◀廬山圖



◀香炉峰と黄岩瀑布図



廬山風景

「歴代天皇御製歌」(六十九)

賈名海屋資料館

「後水尾天皇」ごみづの 第八代・在位一六一一年(十六歳)・一六二九年(三十四歳)

第八代・後水尾天皇は、第十七代・後陽成天皇の第三皇子。後水尾天皇は、三十四歳の時、徳川幕府に堪忍の緒をきられ、讓位された。次の明正天皇から、後水尾天皇、靈元天皇と続き、徳川幕府二百六十五年の前半期、院政で対せられた。この間、後水尾天皇は、皇子、皇女の教育に心をくだかれ、「宸翰教訓書」に偲ばれる。

後水尾天皇は、比叡山の傾斜地に「修学院離宮」を創建。

さまざまに移り変わるもうきことは常なるものよあはれ世の中 元和三年 二十二歳

なかぞらに月やなるらむ呉竹のすぐなる影ぞまどにうつれる 寛永九年 三十七歳

みちくの百のたくみのしわざまで昔におよぶ物はまれにて 寛永十四年 四十二歳

ゆきゆきて思ふもかなし末とほくこえしたか根の峰の白雲 延宝四年 八十一歳

童謡 『落ち葉のワルツ』

高橋育郎 作詩

おちば おちば

落ち葉は 舞うよ

おちば おちば 風にたわむれ

小鳥のように 蝶々のように

歌いながら 踊っているよ

おちば おちば

黄色い 落ち葉

おちば おちば まつかな落ち葉

小さな窓の 白いカーテン

入目を浴びて 染まっているよ

おちば おちば

秋の おわりを

おちば おちば さよならしてる

また来る春を 夢見て眠る

雪のふとんで 眠るよ落ち葉

おちば おちば 落ち葉は舞うよ

おちば おちば 落ち葉は歌う

三輪山(1) 夏目勝弘

学校の夏休みの終る九月に、三輪山へ行こうとフト思った。

三十年前になるであろう、山の辺の道に万葉集を思い、三輪神社よりひたすら石上神宮までを歩いたことを。

その後先生御夫婦が登られたこともあり、一度は登ってみたいと思いつけていた。

今になって急に登ってみたくなり、また今一度原点に戻って、自分の短歌というものを考えてみようと思いついた。

三輪山の山裾帯は、原始の時代より三輪山を中心とした信仰の地でもある。

大陸の文化の未だ流入の無い前の、大和朝廷形成の地でもあり、山の辺の道の基点でもある。

三輪山から石上神宮にかけては、大和朝廷の礎となった。崇神天皇陵、景行天皇陵があり、三輪神社の神である大物主神の妻となった、ヤマトトトビモモノヒメノミコトの箸墓もある。

三輪山は古代より信仰の対象とされてきた、円錐状の山形は神南備と呼ばれ、神々が舞い降りる山でもある。

円錐状の美しい山形は蛇がトゲロを踏く姿をイメージし邪神と重ね合わせた。また神南備の「なび」は蛇という説もある。

現に三輪神社の神様は、大物主命で邪神である。

蛇を恐れ祀ってきたのは、縄文時代から続いているものであり、現在でも残っている物として注縄がある。

これは蛇が絡み合っている形と云われて今でも各神社や正月では各家庭で飾る。

「日本書紀」に第二十二代雄略天皇(四七九)の記事に三輪山に祀られる神が蛇であったとの記述がある。

三輪山周辺の人々の原始的信仰の跡が山頂に残っている。それが太陽信仰であり、山頂には「神の峰」といわれる場所には、日向神社が祀られていた。今は麓に遷座されている。

三輪山を聖なる山と仰いだ大和王権は、三輪山から昇る朝日に自らの皇祖神である、天照大神の姿を重ね合せた。

聖なる太陽は、三輪山の真東二位置する伊勢から昇ってくる。その太陽の生れる他には、伊勢神宮が建造され、天照大神が祀られた。

夕日の沈む真西には、イザナミノミコトの幽宮かくれのみやのある、淡路島の伊勢の森に夕日が沈む。

真東は伊勢神宮、真西は淡路島の伊勢の森があり、その中心に三輪山がある。

春分、秋分の太陽は、伊勢神宮から昇り、三輪山の真上を通り淡路島の伊勢の森に沈む。

太陽の道である(以上は、池田潤著、龍神のコード、戒光祥出版による)

三輪神社は、崇神天皇の八年と伝わるが、三輪山は原始的信仰の中心のな山であった。

そして飛鳥時代となり、万葉集初期を代表する歌人の額田女王が活躍した時代でもある。

○三輪山をしかも隠すか雲だにも情こころあらなも隠さふべしや(巻一十八)

天津の宮に遷都されたとき、天皇のもとへ向われるときに、三輪山への郷愁が自然と口をつけて出てきた歌だと思う。

山の辺の道を通り、人麻呂が巻向の里の妻の許に通つた、道を歩みまた穴師川の瀬音を聞き、そして巻向山、弓月ヶ岳に無心で向つてみたい。山の辺の道は短歌のエキスが満ち溢れている場所だ

と思う。

「氷魚」のことから (190) 岡本八千代

子規逝くや十七日の月明に
雁渡る日にいくばくぞ庵の空

この二句は高浜虚子の作品である。「十七日の」というのは立待月のことで、子規が永眠したのは(1902年)九月十九日未明の立待月の美しい月明かりの時だった。

今日は十九日(2016年)百十四年目の命日に当たるとおもう。私はこのとき、子規の「七草集」のことから書きはじめた。

○七草集とは(前回のつづき)

例えば「蘭の巻」より

有風遠而微
漸来吹庭樹
梧戦縦動
聞細波打岸
忽聞鳥烏声
歛耳漸近
至窗前
声調嘹唳
乃知其漁歌
棹声咿軋如雁鳴
使人悄然
起而開窗
江月印流
前岸如烟

風有り遠くして微かに
漸く来りて庭樹に吹く
梧は戦き縦は動れ
細波の岸を打つを聞く
忽ち鳥烏の声を聞き
耳を歛れば漸く近づく
窗前に至り
声調嘹唳たり
乃ち其の漁歌なるを知る
棹声軋して雁鳴くが如く
人をして悄然たら使む
起ちて窗を開ければ
江月は印りて流れ
前岸は烟りの如し

只見一燈

只た一燈の

浮波而去

波に浮かびて去るを見る

という一節のように、平凡のようではあるが、「写生的」で、その景色のようすから人をも思い浮はせるものがあると感じる。

「女郎花の巻」には歌五十余首、「芒のまき」俳句三十余句、等々があるという。例えば――。

○夏日向嶋閑居のときの歌

檐のはにうまつらねたる檜の木の下枝をあらみ白帆行く見ゆ
○五月雨将霽

さみだれの間なく時なくふる空のこのもかのもに光見えけり

○俳句では

秋の蚊や畳にそふて低く飛ぶ
朝顔や日うらに残る花つ

があるが、写生、そして己が心の動きによる感動が歌われていて、どこかに寂がある。

この二句の間に、小さな文字で……。

「我生まれつき弱く殊に去年の春いたくやみ煩ひしよりいついゆべ

うもおもほえず、人生五十というそれさ覚束なければただ

けふも無事に過ぎたりとて日毎に喜ぶる身こそかなしけれ」と

書いてあった。子規は、この頃からすでに自分の寿命を感じて

いたような……。そして、その中で、自分をふるいたたせていたよ

うに感じる。

この向嶋滞在中、佐々田探花という友人に誘われて、鎌倉に

遊んだこともあった。「しらぬ海や山見ることのうれしければいづ

くともなく旅立にけり」と詠んで出発した――。

ことのはスケッチ(45) 今泉由利

「明星」

「これはね、ジョン万次郎の初孫の中濱絲子さんが、手ずからお渡し下さった帯留なの、これからは貴女に持つて欲しいの」と高山福子母から私に渡った。翡翠に、小花が浮彫りされた、やさしい帯留。

私の、長い外国での生活の拠り所だったし、今も私の中心にある。

「明星」の歌人であった「中濱絲子」を調べたく、近くの図書館へ。「明星」誌は消滅してしまったけれど「復刻版」は、都立麻布中央図書館で閲覧出来ることを教わり「麻布十番」に着く。

すぐ「永坂更科」に出あう。医学生だった父が繁く通った蕎麦屋であり、私の、東京での学生だった頃、父母の家へ帰る時には、永坂更科の色白の蕎麦と、口細のぶつくりした壺に、蕎麦つゆを入れていただき、おみやげに持参したものでした。懐かしい、大切な思い出。まだ私のところに、永坂さらしふと書かれた壺が大切にしている。

大木に囲まれた麻布図書館で、「明星」を全部数見せていた。だいたいことを頼み、長く待った。「奥の方から出てきますから、時間がかかります」とは知らされていて。

厚いハードカバーの本が十二冊、「元本」といわれた大きなサイズが嚴重に二冊。

まさかの大量の本に、どう運べば良いのかわからなくなっている。と…スーパーマーケットにある買物用の車があり、「これ使って良いです」と。

ちよつと昼食前に…と思ってきたのに、これだけの本をかかえて…図書館は、夜の九時まで開いているという。「よし全部読む」。原本と復刻版と重なっているところがあつたから、どンドン読み進んだ。身体が椅子の形になつてしまった頃、二応、読み終えた。明治時代のすごいドラマが行間からとび出してくる…たじたじしてしまふ。でも、私の帯留に、深く厚い思いが加わつてきた。

文芸誌「明星」。与謝野鉄幹主宰。1900年（明治33年）～1908年（明治41年）。

与謝野、寛を、鉄幹と名付けたのは「大田垣蓮月」であるとの記述にまずびつくり。

与謝野鉄幹は、落合直文に師事、明治33年新詩社を創設。「明星」を発刊。詩歌を中心とする月刊文芸誌。100号で廃刊。与謝野鉄幹、与謝野晶子、北原白秋、木下左太郎、吉井勇、山川登美子、中濱絲子らが属した。

明治三十三年四月 明星 第二号 落合直文

○名もしれぬちひさき星をたづねゆきて住まばやと思ふ夜半もありけり

○ちる花のゆくへをいづことたづぬればたゞ春の風ただ春の水

紅鷲集 中濱糸子

○梅かをるおぼろ月夜に大きな佛もいます鎌倉の里

○友こふるおのが心にひびくらむ常よりさびし入相の鐘

○音たてて流れもゆくかみなかみは巖間の苔のしづくなれども

○みだれちる花の色のみやさかにて春雨くらき庭の面かな

○知らずであらば雲ぞといひて厭はまし月にかけある富士の神山

○心ある人ならばとも思ふだに月にむかひて面なかりけり

○おく露の硯にうけてゐがかまし蝶の舞ひよる山吹の花

○花の香をしろへにして尋ねみん霞みこめたりたそがれの宿

○衣ぬふ母のかたへにねたる児の夢やすからぬ姉の鞠歌

○今ここに惜しき袂を分つとも又のあふぎを名におへとなり

花がたみ 鳳晶子

○小松原なきてむれたつ雉子の尾を更にいろどる夕日かげかな

○しろすみれ櫻がさねか紅梅か何につみて君に送らむ

明治三十三年 五月 第三号

小扇 鳳晶子

○野ばら折りて髪にもかざし手にも持ち永き日野べに君まぢわ
びぬ

○木下闇わか葉の露か身にしみてしづくかりぬ一人組む手に

川狩 虚子

○へうたんの酒に酔ひたる夜振哉

新詩社詠草 中濱糸子

○とろろむる雪のしづくのこちして花の小雨に我れ立ちぬれぬ

○牡丹剪りてをさなき髪にさしやりぬおもわに似たるくれなる
の花

○夢に見し船の行方を問へるかな父に添寝のをさなき弟

○病あしと都の方に傳えけん母のきて泣く夢を見しかな

山川とみ子

○去年の春蝶を埋めし桃の根に華も江いでて花花さきにけり

○新星の露にほへる百合の花を胸におしあてて歌おもふ君

小生の詩 与謝野鉄幹

○やまと歌にさきはへ賜へ西の空ひがしの空の八百萬の神

○ひとり身のこの河下に釣垂れてたのしくもあらず春夏秋冬

明治三十三年 七月 四号

涼扇 落合直文

○滝壺にわが投げ入れし歌の反古浮きて沈みて又浮かずなりぬ
○岩清水たちより見ればその底に瘦せしわが影老いし松影

編集室だより【二〇一六年九月】

○奥多摩での「おくてん」の季節がやってきました。私の家のすぐ近くの額縁屋さんのオーナーが、「絵と私」を奥多摩の工房まで運んで下さり、飾りつけをし、去年の絵を持ち帰るといふ作業をして下さるのです。額縁屋さんには、美術の秋で大忙し。従って「大急ぎ」になって。奥多摩を楽しむ暇もないのが残念ですけれど道中の高速道路や変貌する東京ドライブは楽しみです。

○旧岩崎邸庭園、横山大観記念館へ吟行。

明治十年。日本政府の招聘により、日本に来られた「ジョサイア・コンドル」さん。東京大学工学部建築学科の初代教師になられ、鹿鳴館、上野博物館、ニコライ堂：洋風建築を設計された。日本を世界に導いて下さったのですね。

すぐ近く「横山大観記念館」京風数寄屋造りの二階の九十才まで絵を描かれた和室のアトリエ。そこには、奥様のための縞の着物が衣紋掛けに。夕顔の意匠。鶴鴿意匠。大観画伯素晴らしい。

○ニューヨークでテロ騒ぎ。どうしてこんなことが理解出来ない。などと呑気なことを言ってる場合ではないのに、うるたえているばかり。つらい。

○パソコン、電話、ファックス：の置いてある辺り、コードがいろいろいからみあつて、埃もよぶし：きれいさっぱりによしようと、一つ一つ接続を間違えないように慎重にしたはずなのに、インターネットが届かなくなってしまった。夜中になつてしまふほど努力をしたけれど、自分ではどうしようもなく、助けを求めた。専門家が電話で誘導して下さい、すぐ直つただけれど、どうにもみじめな気持。

○三河アララギの先達の歌集を繙き、今の三河アララギに参加していただく、導きいただくこんな気持でいます。知るも知らなかったことも：沢山のことが甦る。なつかしくてたまらない。

これからも、大勢の先輩に助けをいただこうと思います。資料をお持ちの方、どうぞご参加下さい。

○「私の一首」が届きません。ご自身の短歌とその心を、是非三河アララギ紙面に残して下さい。原稿をお待ちしています。

野菜の花 (5)

鈴木孝雄



○ 小松菜

コマツナ（小松菜）はアブラナに属し、アブラナ科野菜の黄色い花はまとめて菜の花と称される。従って、写真の花はまさに菜の花である。

20年ほど前、工業的に菜種油を使うことになり、英語でrapeseed oilと言う事を初めて知った。菜の花は英語ではrapeあるいはrape-flowerであるが、rapeなる単語を嫌って、改良品種商標のCanola-flowerと呼ぶ人も多い。

アブラナ科の非結球野菜をツケナと言い、コマツナはその一種で、原産は中国大陸と考えられる。我が国には奈良時代以前に渡来し、栽培地に適合した様々な変わり種が生まれた。コマツナは下総国葛飾郡小松川地方で産したことから小松菜と呼ばれた。俗説には、5代将軍綱吉がこの地を鷹狩で訪れた際、村人がコマツナの入った汁をご馳走したところ、旨い旨いと言って褒め、名前を訊いたところ、名前は無いとのことで、この地の名前を付けたらよかろう、として小松菜と命名されたと伝えられる。

コマツナの旬は11月から3月。写真のような花が咲いてしまうと苦くなるので、どう立ち前に収穫する。美味に加え、栄養満点の野菜で、冬場のビタミン・カルシウム補給にはもってこい。料理は、和食ばかりでなく、中華あるいは洋食にも合い、重宝な濃緑野菜。

栽培は易しく、冬場を除けば年中可能で家庭菜園向き。小生の畑でもほぼ年中絶やすことが無い。無農薬栽培では、害虫には注意が必要で、特にシンクイムシの被害は絶大。一日にして全滅の憂き目に会うこともある。

次回は、ニラの花の予定です。

お知らせ

△十二月号の原稿は、十月三十一日(月)までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月原稿の返却希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇一六―五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美